

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一7:25～31 「時は縮まっている」

[25-26]「処女のことについて、私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみによって信頼できる者として、意見を述べます。現在の危急のときには、男はそのままの状態にとどまるのがよいと思います」

パウロは未婚の者については、すでに勧めをしてきた。→Ⅰコリント7:8 25節では特に「処女」という言葉を使って、前出のやもめとか独身主義者と違って、まだ実家にいて父親の養育のもとにある娘のことを指したものと思われる。彼の意見は単なる個人的なものではなく、「主のあわれみにより信頼できる者として」つまり神からの知恵と権威をもって語っているのである。26節の「男」は処女である娘の父親と思われるが、もっと広い意味ではその父親をも含めた男全般に語っているとも考えられる。「現在の危急のとき」とはイエス・キリストの再臨、あるいは迫害を意識しての言葉。この世的な事柄に思いを奪われがちなコリント人、あるいは私たちにとって神のさばきが近づきつつあることを常に意識し、心備えをしていることは大切。「そのままの状態」→27節

[27]「あなたが妻に結ばれているなら、解かれたいと考えてはいけません。妻に結ばれていないのなら、妻を得たいと思ってはいけません」

神のさばきの日が近づきつつあるということを経験し、妻と別れようとしたり、あるいは独身の者が妻を得ようと思ってはいけない。つまり、そのままではいざいとの勧めである。当時は今にも主のさばきの時が来るという切迫感と迫害の危険が満ち満ちていたと考えられる。それから二千年近くの時が流れた今日、パウロのことばに疑いを持つ人々があるかもしれない。しかし主は今日に至るまで、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んで忍耐して待っておられるのである。→Ⅱペテロ3:3～13、Ⅱコリント6:1～2

[28]「しかし、たとえあなたが結婚したからといって、罪を犯すわけではありません。たとえ処女が結婚したからといって、罪を犯すわけではありません。ただ、それらの人々は、その身に苦難を招くでしょう。わたしはあなたがたを、そのようなめに会わせたくないのです」

ここでは父と娘だけの父子家庭が対象となっていると考えられる。父の再婚や娘の結婚は罪を犯すことではない。しかしパウロはここで、結婚の結果、その身に苦難を招くようなめに会わせたくない心配りをする。これは神のさばきの時が近づいているということを背景として、主への愛と家族への配慮の板ばさみ、葛藤などが考えられているのであろう。

[29]「兄弟たちよ。私は次のことを言いたいのです。時は縮まっています。今からは、妻のある者は妻のない者のようにしていなさい」

これは妻を無視することや離婚することを勧めているのではなく、キリストの再臨、神のさばきの時が近づいている今、生活の事、目先のことなどに追われて肝心のことを忘れてしまわないで、神に熱心に仕えなさいとの思いから語られていることばである。パウロの時代よりも今はさらに時が縮まっている。

[30-31]「泣く者は泣かない者のように、喜ぶ者は喜ばない者のように、買う者は所有しない者のようにしていなさい。世の富を用いる者は用いすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです」

泣いたり笑ったり、買ったり売ったりというのは先に言われた結婚の問題と同じく、人間の世界における日常的なことである。また世の富を有効に用いる、すなわち貯める、増やす、使うということも人間の営みの一つである。しかし、やがてこの世の有様は過ぎ去って行く。

私たちが全世界の創造主、さばき主であるお方の前に立つ時が近づきつつある。泣く者はもうその時が短いことを思い、喜ぶ者はその喜びが天にまで続くものであるかどうかよくかえりみ、売買したりこの世の富を用いる者はそれが天に積む宝であるかどうかを確かめなければならない。この世でいくら富める者であっても、神の前に何ひとつ持たないようになってはいけない。この世のものは何ひとつ持って行くことはできないのである。→ I ヨハネ 2:15~17、I ペテロ 4:7~8